ALCS 学修行動比較調査2020

全体結果梗概

ver.1

ALCSはAcademic Learning and Cultivation Surveyの頭字語です

大学間の中間活動体である教学比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学において共通のウェブ・サーベイを用いた学修行動比較調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別にそれぞれの目的に適った分析がおこなわれると共に、参加大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析・検討が施されています。ここでは調査実施母体である教学比較IRコモンズとして、個別大学に拠らず、有効回収基準を充たした全学生を総計した結果の一端について公開します。

今回は6年目の調査です。参加大学は22大学、当調査では最多の約2万5千名の大学生たちが寄せた回答結果から、またいくつもの発見と確認ができました。

なお、他の結果や情報、方法の詳細についてはコモンズのwebページ（Google検索などで「教学比較IR」と）をご覧ください。

実査期間（全体）2020年7月 ～21年2月

調査実施方法　ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベイ

調査大学数　22

有効回収数　25320

有効回収とは80設問への回答率が60%以上等、ALCSの有効回収3基準を満たした回収

回答者学年構成　1年生53%　3年生47%　1、3年生間での比率

性別構成　男性17%　女性83%

25320 名
有効回収数

61%
回収率
22大学間平均

94%
全回収数中の有効回収率

この調査は1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によっては別の学年でも実施しています。

参加大学（名称の50音順）跡見学園女子大学 大妻女子大学 お茶の水女子大学 嘉悦大学 川崎医科大学 京都看護大学 京都光華女子大学 京都女子大学 共立女子大学 金城学院大学 就実大学 椙山女学園大学 津田塾大学 帝京大学 田園調布学園大学 東京女子大学 長崎県立大学 奈良女子大学 日本女子大学 フェリス女学院大学 宮城大学 横浜市立大学

経験　大学の授業や学びに関する経験

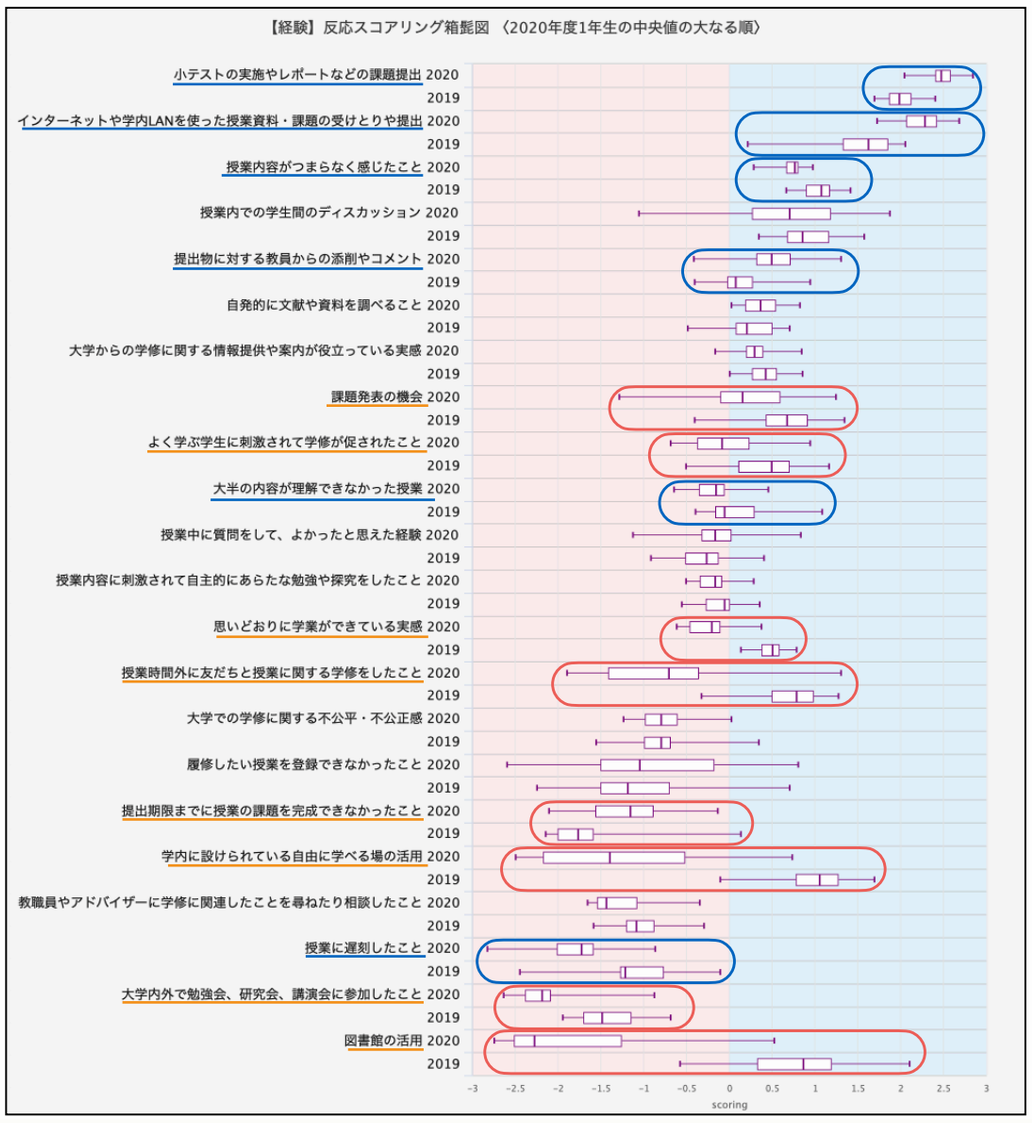
以下4つの設問群の箱ひげ図は、調査対象各大学の昨年度と今年度の1年生の各設問についてのスコアリング・データ*の平均値を用い、それらを今年度の中央値の大なる順に表出した結果です。例年、この比較図は1-3年生の学年間比較を提示してきました。しかし今年度はSARS-CoV-2の感染騒動により、大学の教学状況は例外なく従前にない変化に見舞われ、とくに1年生は大学での授業経験が端からまさにインターネット大学になったという状況でした。よってここでは今年度とそうした状況になかった前年度との1年生間の比較をとりあげました。

昨年度とのデータ構成は2大学のみが別の大学に入れ替わっただけの同数22大学でした（ただし学年の有効回収数が100未満の1ケースは当算定対象外）。箱ひげ図の特性を利して、比較対の箱の部分が完全または、ほぼ重なりがなかったケースに明らかな差異を認めるという基準で、今年度の回答結果が教学のうえで一般的にみて良き方向に変化したところを青、その反対方向に変化した設問を朱色で囲って表現しました。

「経験」群では22設問中14、半数以上で明白な差異をみました。これらは教学経験上のことですから、今年度の事態を受けた結果としては必然といえるでしょう。ただし、差異が生じた14設問中の約半数6設問は肯定的な方向へのシフトでした。したがって、生じた負の事柄が皮肉にも教学経験上は、増すことが課題であったことをはっきりと前進させることになり、今年度の事態が一概に損失とはいえない面をもっていた、といえそうな結果になりました。

今年度、経験があきらかに増した項は課題提出の機会、そのためのネット利用、提出物への教員からの応答、遅刻せずに出席したことなど、遠隔授業、すなわちネット利用ならではの特性に伴う自然な効果といえることでした。ただ、注目に値するのは、授業をつまらなく感じた経験や理解できなかった授業が明白に減じたことです。しかし、これは堅い椅子にほとんど身動きせずに聴いている授業から解放されたことを反映しただけのことなのかもしれません。

一方、経験が明白に減少してしまった項は、在宅学修を強いられたことによる負の影響をそのまま映し出しています。これら正負の項の性質を相対（あいたい）して見比べると、必ずしも否定的なことばかりではなかった、と語ってしまうにはいささか躊躇をおぼえそうです。



成長　入学時からの成長感

入学時に比した成長感を問うこの設問群に対する1年生の回答は、2年後の3年生時点での回答結果をみるための基準、いわばデフォルト値を得るためにあります。よって、ここでみる結果が全体に肯定域にあって昨年度の結果と差異がほとんど認められなかったこと、総じて箱の大きさ、ひげの長さも短くて大学間差異がほとんど認められなかったことなどの特徴は、入学してほとんど時が経っていない1年生の反応としては至極自然なこととみることができます。

この状態から、大学での修学経験による成長感が、どの学生に、どのような設問ではっきりと得られるか、また大学単位ではその伸張の程度がどのような違いをもってあらわれてくるか、がこの設問群での見どころになります。

したがって、ここでは今年度の特異な教学状況の影響も、昨年度1年生との比較でほとんど認められませんでしたが、デフォルト取得という意味では妥当な結果であったといえます。ただ、3項目については昨年度に比してあきらかに違っていました。ネット利用授業で尽くされ、課題も頻出したことで、ICT運用力と表現すべき内容の文章を書く力に高まった感があったようです。他方、在宅学修によって人間関係を築いたり調整する力を養わう機会が損なわれたという当然の結果も確認できました。プレゼンの機会なども十分には確保できなかった様子が認められました。2年後の教学環境はかつての状況が取り戻されるはずですので、この全般に制約された状況から解き放たれたところの成長感が、いつもとは違ったかたちであらわれてくるかもしれません。

*スコアリング・データの生成法および箱ひげ図についての詳細はコモンズめウェブ・サイト https://cmpir.jpの説明をご覧ください。

時間 日あたり、または週あたり平均値

授業に関する授業外の学修時間は、諸大学を平均すると数年前までは1時間前後という値であり、その伸張が大学における教学の一般的な課題のひとつとして語られていました。それが日本の大学の現実の姿であるといったマスコミ的言表もあったため、授業外にはほとんど勉強しないことが当たり前の振る舞い方であるかのようなおかしな共通認識が学生たちにも強く作用していたともいえます。それが強靱でありつづけたのはその認識のもとで行動し、あるいはそう応じることは、そうしないことよりも遙かに楽であったということもあるでしょう。

ただ、そうした解釈を通り越して、最近は単位制の実質化や授業外の学修が強調されだし、大学自身も気にしてその時間数を学生に問い続けてきたこともあってか、その値はALCSの調査結果をみていくなかで次第に伸びていくという事実を観察してきました。そして昨年度は授業に関する一日あたりの学修時間が、はじめて多くの大学の授業時間である90分を、1、3年生ともに上回るという結果にいたったのでした。それは大学生の平均像が、日々、1コマ分の授業相当の時間を、授業場面を離れても勉強に費やしているということでしたから、素直に喜ばしいことであり、「勉強しない大学生」という社会通念の終わりがやっと訪れたといった観がありました。

今般の教学状況の異常事態は、その傾向をさらに強く後押しする結果となり、授業に関する授業外の学修時間は1、3年生共に一層大幅に増加、一日あたり2時間を超えました。これは他の設問への回答から読み取れるように、ネット学修で課題要求が大幅に増えたことが主因だったと思われます。在宅学修が教室で学ぶ感覚を損ね、基本的に授業外学修をしている気分を強めたこともあったかもしれません。これが能動的、自主的な学びという質的変容を意味しているわけではなさそうなことは、授業に関連しない学びの時間数については見事に昨年と変化しなかったところに読み取れます。また、今年度は社会経済活動の自粛が学生のバイトにも影響しているという話が少なからず目立ちましたが、学生からの平均的な反応をみるかぎり、1年生には変化なく、3年生にやや減少傾向が見いだされたという程度に収まりました。

授業に関する授業外学修時間

1年生 92 ▶ 141 分 / 日

3年生 97 ▶ 122 分 / 日

授業に関連しない学習時間

1年生 45 ▶ 46 分 / 日

3年生 78 ▶ 82 分 / 日

アルバイトなどの就労時間

1年生 13:14 ▶ 13 時間 14 分 / 週

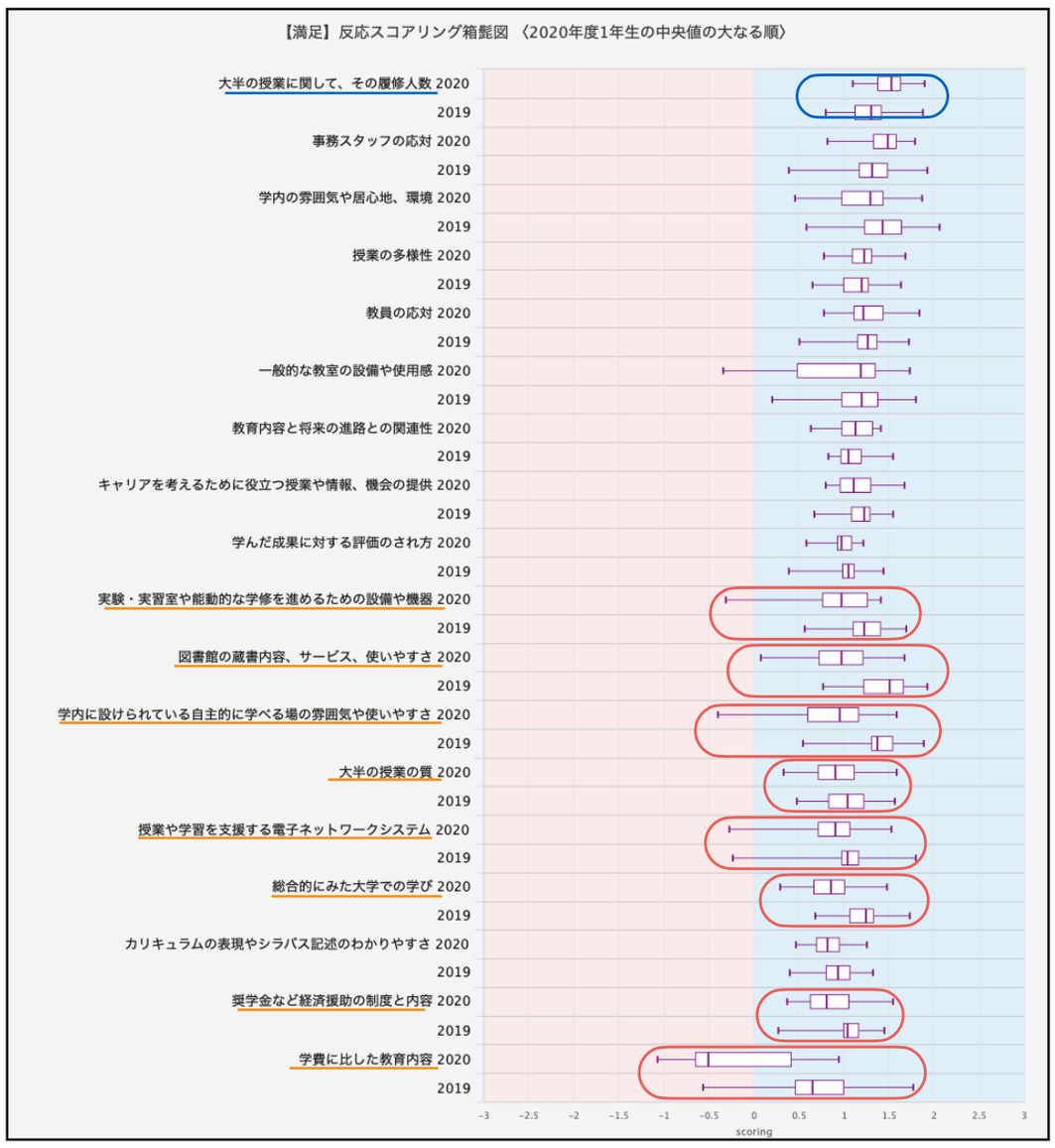
3年生 14:09 ▶ 13 時間 33 分 / 週

満足 教学に関わる満足度

「満足」群の設問で大半の項が昨年の1年生よりも今年の1年生のほうが満足できたと回答した、としたらおおごとでした。大学設置基準は現実に即して大幅改訂を迫られたにちがいありません。しかし、さすがにそれはなく、履修人数への満足度が高まった（在宅受講はいつも一人で受講しているも同然ですので）こと以外は、満足感は変化なしか、下落しました。

在宅学修を強いられたため設備面での満足度は高まりようがなかったので、それらはおいておくとして、まず「総合的にみた大学での学び」あるいは「大学の授業の質」において明白に満足度を低下させたことが確認できます。これは今年度の大学生が地球規模で等しく被った損失を端的に示しているといってよいでしょう。ただし、グラフをよくみると「大学の授業の質」において、ひげの肯定方向の端点が、昨年度と変化しておらず比較的高い満足度を示している大学もあったことは注意がいりそうです。これが同一大学におけることなのか、入れ替わった結果なのかはこのかぎりでは不明ですが、遠隔主体ないし全体であった授業も、質という点では、従前の授業に比して満足度を劣化させるとまではいいきれないようです。

十分に納得できる結果としてある「学費に比した授業内容」という結果、これは8割方の大学の平均的な回答について昨年までは肯定的な回答を得ていましたが、今年度は一転して否定的な回答を得ました。これは当然、授業以外にもキャンパス施設の利用や、共に学ぶ学生たちとの交流機会なども含めた学費コストに対するパフォーマンス評価としてみるべきものでしょう。

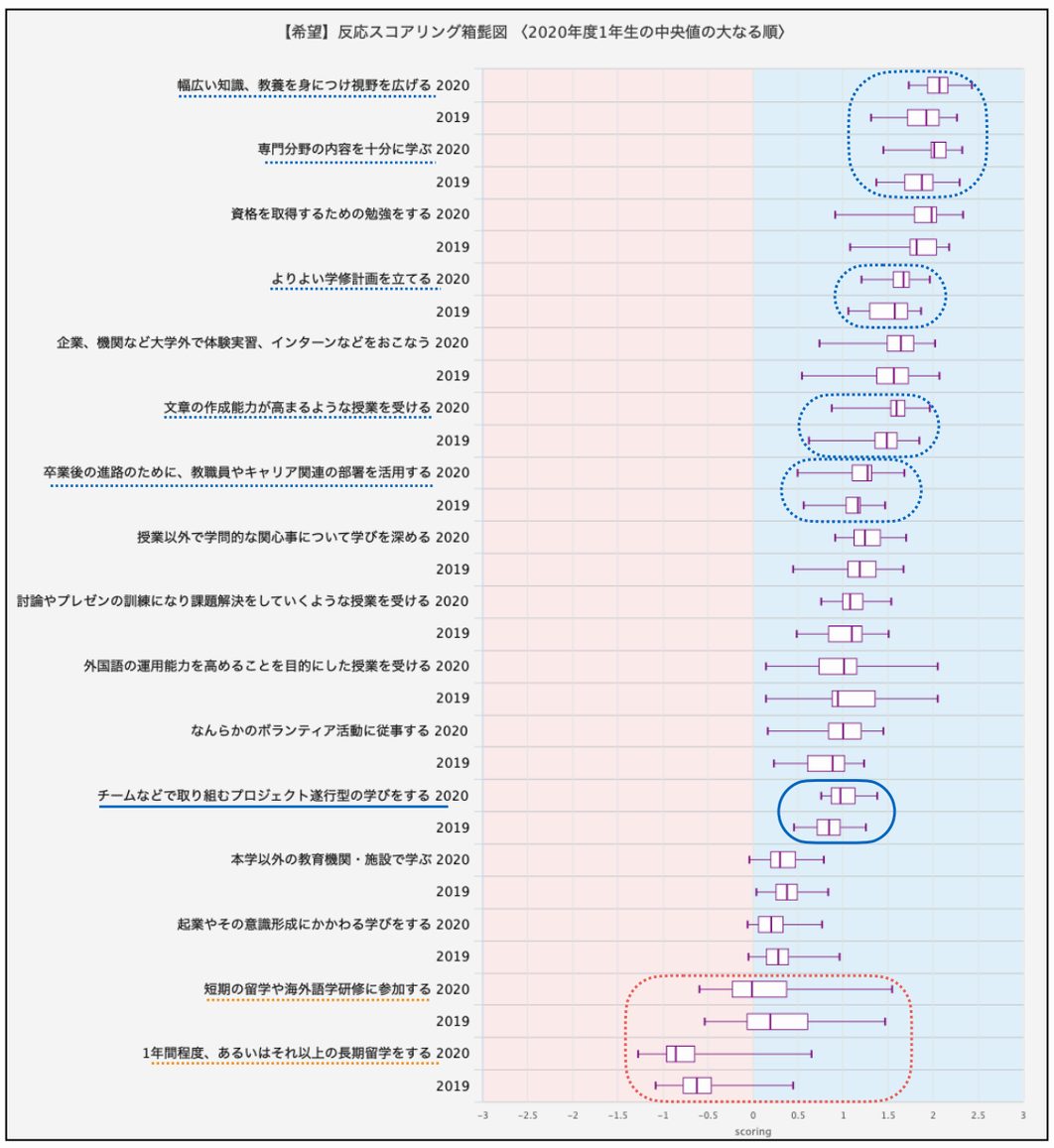


希望 在学中に望むこと

学生たちが在学中の学修において「最も」望んでいること、むろんそれはこの限られた数の設問のなかでの話ですが、時（調査年度や学年）と場所（さまざまな大学）によらず一貫して同じです。「幅広い知識や教養を身につけ視野を広げること」そして「専門分野の内容を十分に学ぶ」ことです。あまりにも保守的、伝統的、それだけに陳腐ともいえそうなこの希望の表明はしかし、大学に対して直接の受益者が求めることは、時代を超えて一般性、普遍性があるということなのでしょう。

今年度の教学状況の特殊性は、このほとんど変わることのない学生たちの望みを一層際立たせることになりました。すなわち常に1、2ランクで高い希望が示されてきた上記の二項は昨年度より一層に、というわけではありませんでしたが、高まりをみせました。点線で囲ったこの箱ひげの形状で確認できるように、おそらく回答スケールの天井に接近しているとみられます。それはひげの肯定方向の端点がほとんど変わらない一方で、箱自体は両者とも今年度は一層縮んでおり、大学間にあまり差異がない状態になっていることから読み取れます。換言すれば、どの大学でもほとんどの学生がこの2点を強く求めており、今回の教学状況の変容は、その大学としてのあるべき基本の姿をあらためて求める結果を導いたということなのでしょう。

それに対して、政策的には大学に対して強く求められてきたにもかかわらず、例年、学生全体としては希望が最も弱かった「留学」に関しては、今回の状況がまさにそれに正面から水を差すものであったこともあり、より明確に大半が望んでいないという結果に落ち着きました。



（編集・文責: 教学比較IRコモンズ 東 京一）